

農業ふれあい公園だより No.19

2012
Feb.

【岩手県農業ふれあい公園 農業科学博物館】 岩手県北上市飯豊 3-110 TEL 0197 - 68 - 3975



左から：ハマナス、ヤブツバキ、ナツツバキ、ナツボダイジュ、アンズ、ガマズミ(実)、コブシ(実)、ジュウガツザクラ、ヒメリンゴ、マユミ(実)

農業ふれあい公園は、広さ 170,000 m²の緑に囲まれた県民の皆様の公園です。公園の中には、芝生広場、ひょうたん池、棚田、グランドゴルフ場、ゲートボール場があり、広い駐車場ときれいなトイレも整備されています。芝生広場は、子供たちの遠足や、家族でのピクニックなどで、のんびりと過ごせます。また、外周には樹木に囲まれた1周 1.7kmの散策路があり、ウォーキングに最適です。様々な樹木の花々が、季節を楽しませてくれます。是非ご来園ください。



公園内の農業科学博物館には、江戸時代後期から昭和 40 年頃までに農作業や農業生活で使用していた用具など、約 4500 点の資料が収蔵されています。

第1展示室「農業れきし館」では、県内の農具や生活用具を展示し、かつての農村の歴史、くらしや地域農業の発展につくした人々を紹介しています。第2展示室「農業かがく館」では、子どもたちが、ゲームやパソコンにふれながら学習し、科学の目で見えた農業の不思議や岩手の農業が理解できるようになっており、毎年多くの小学生や幼稚園児が学習や遠足などに訪れています。

平成23年度 企画展レポート

◎第48回 農業改良普及事業創成期の技術資料 ～手書きの巻物～

平成23年4月5日～6月30日



第二次世界大戦後、日本は深刻な食糧危機になりました。この危機をスムーズに克服できたのは、農家の生産意欲の高まりとともに、革新的な農業技術の開発、関係機関と団体との一体的な技術等の普及啓蒙が大きく貢献したと言われています。

企画展では、この時代の食糧増産運動に対処して、昭和28年ごろ、農業技術の普及指導に用いた「手書きの巻物」資料と、博物館で所蔵している当時の農業機械を展示しながら、技術内容と農業の動向を紹介しました。



◎第49回 命を救った食べ物 ～飢饉の歴史と生きるための食物～

平成23年7月7日～9月30日



日本での稲作は、江戸時代までは未熟な技術に加えて、不順天候等による減収が頻繁に起こり、凶作に伴う飢饉が絶えませんでした。明治以降、日本は西洋から新たな技術を取り入れながら独自の技術開発を進め、食料の増産に力をいれましたが、不作は引き続き頻発しました。

戦後は高度な経済成長とともに、生産技術が著しく進歩しました。しかし今でも約10年に1回程度は不順な天候によって稲作の不作年があり、

野菜や果物でも台風や大雨等によって不作となることがあります。

世界中から食料を輸入することができる今、飢饉は昔話となりつつありますが、凶作の多かった時代、人々は何を食べて命をつないできたのか、飢饉の歴史とともに当時の食を紹介しました。



◎第50回 生活・生業と履物

平成23年10月7日～12月27日



今までに発見された最古の履物は、古いエジプトのサンダルといわれています。わが国では、静岡県の登呂遺跡から弥生時代後期に泥深い田んぼで使われた田下駄が発見されていますが、田下駄は昭和の時代まで使われていました。

履物は、一般に足の保護と容姿を整えるために履かれ、着装することで民族の階級など儀礼的・政治的性格を与えられること

もありますが、一般庶民には、原始の昔より容姿を目的としたものはほとんどなく、労働の補助具でした。

企画展では、履物の変遷と、生活や生業の中で使われてきた履物を紹介しました。



◎第51回 昔の灯りと暖を取る道具

平成24年1月9日～3月28日



長い歴史の中で、人々は食物を煮焼きし、体を暖め、夜の闇を明るく照らすために、全て火を直接利用してきました。火は、原始的な焚き火（庭火）から、縄文時代の炉を経て、居住空間の分化と共に登場した囲炉裏など、生活の中で重要な役割を果たしてきました。

この囲炉裏の火から、炊事、暖房、照明など、それぞれの機能が混然としながらも分離し、発達しました。暖房は囲炉裏から火鉢、行火、炬燵、ストーブに、炊事は竈や七輪へ、照明は松明や篝火から魚油や草種油を用いた行灯、蠟燭、さらには石油を用いたランプなどに進化

してきました。

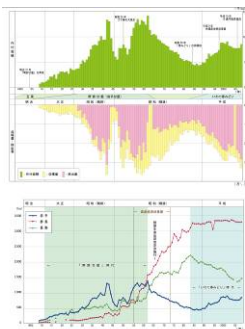
この企画展では、江戸時代から昭和前半まで使用されてきた、暖房に用いた器具、明かりを灯すために用いた道具を紹介しました。

◎平成23年度 特別展 「園芸産地いわて 過去・現在・そして未来へ」

～ 「南部甘藍」から「いわて春みどり」まで ～

平成24年1月22日～2月19日

岩手県の甘藍（キャベツ）栽培は、明治37年に画期的なF1品種「南部甘藍」が育成されたことにより急速に栽培が拡大し、昭和17～18年には日本最大のキャベツ産地となりました。しかし、昭和40年以降、病虫害に



よる品質低下や他産地の台頭などにより、南部甘藍は市場から姿を消すこととなりました。

昭和50年代後半、再びキャベツ生産を目指そうと岩手町の生産者有志が立ち上がり、柔らかくて甘い、春系キャベツの栽培に取り組みました。多くの課題を一つ一つ克服しながら、良品生産と規模拡大に努めた結果、現在は岩手県ブランド「いわて春みどり」として、全国的に評価される産地になりました。

この特別展では、これまでの関係者の産地復興に懸ける思いが実った貴重な例として、岩手町におけるキャベツ生産の足取りと、復興の取り組みを紹介しました。



◎第52回企画展「畜力と農作業」のお知らせ

開催期間：平成24年4月8日～6月29日

牛馬は昔の農作業に欠かせないものであり、農家と深いかわりを持ち、家族同様の扱いをしながら



生活して来ました。

企画展では、昭和30年の農作業の様子と、畜力水田作業用具（馬具）などを紹介します。

HOT NEWS!

多目的ホールの貸し出し

農業科学博物館では、県民の皆様にも多目的ホールを無料で貸し出しています。

写真や絵画などの「作品展示」や、「学習活動の発表会」など、皆様のアイデアで色々な使い方ができます。



利用を希望される方は、博物館までご連絡ください。

博物館・公園トピックス

🌱 今年も盛会！〈農の生け花展〉 平成 23 年 9 月 2 日(金)～ 3 日(土) 開催



平成 23 年 9 月 2 日～ 3 日の農業研究センター参観デーの開催に合わせ、県内の「農の生け花」愛好者グループの方々が、当博物館を会場に「農の生け花展」を開きました。本年は開催 15 周年を記念し、これまでの活動を振り返って写真やパネルの展示も行いました。

グループの皆さんは朝早くから野菜や草花を持ち寄り、農具の荷かごや五升杓、鍋などを花器に、秋のおとずれを思わせる素晴らしい作品を作成し、来館者からは、生活感や豊作への願いが感じ取れる作品だ!と大好評でした。

また、北上市の及川昭一さんによる「岳水流盆景」作品展も行いました。

🌱 親子で体験！
「お正月の松飾りをつくってみよう！」 平成 23 年 12 月 25 日(日) 開催



年の瀬も押し迫った 12 月 25 日、小学生と保護者を対象に「冬休み体験学習会」として松飾り作りを行いました。

参加者は、北上市と花巻市の親子 4 組（子ども 5 名、保護者 5 名）で、講師の藤原勝栄さん（65 歳）に作り方を教わりました。



藤原さんから、ワラの選び方や、より合わせの手ほどきを受け、協力しながらしめ縄を作り、これを輪にして、紙垂（かみしで）や、みかん、松の小枝、笹竹などを飾り付け、完成させました。最後に、子ども達が出来上がった松飾りを前に捧げ持ち、先生を囲んで記念写真を撮り、早く家に帰って飾りたい！と笑顔で家路につきました。

🌱 新しい収蔵物！【手動精米機（脱ぶ機）】



一関市の三浦平四郎さんから「金剛砥石式手動精米機」が寄贈されました。

この機械は大正から昭和初期の製造と思われ、国内では同種の機械の紹介が見あたらず、貴重な品と考えられます。

装置は二人で両側から足踏みで動かして粳摺りを行います。金剛砥石を使用しており、石臼から動力精米に代わる途中の過程で使用されたものです。来館の際には是非ご覧ください。

HOT NEWS!